

視察報告書

シビウ国際演劇祭・視察報告 ——世界最大級の国際演劇祭の様相

平井愛子

〈はじめに〉

第31回シビウ国際演劇祭が2024年6月21日から30日までの10日間に渡ってルーマニアの首都ブカレストの北西に位置する文化都市シビウで開催された。筆者は同演劇祭の関連イベントである学術プラットフォームに招待され、6月21日から24日までの4日間、エディンバラ・フェスティバルやアビニョン演劇祭と並ぶ世界三大演劇祭の一つであるこの演劇祭の一端を現地シビウで体験することができた。

〈シビウ国際演劇祭の沿革〉

シビウ国際演劇祭は、1994年に地元シビウのラドゥ・スタンカ劇場ⁱ (Radu Stanca) の俳優だったコンスタンチン・キリアックⁱⁱ (Constantin Chiriac) が率いる地元の演劇関係者たちによって創設された。当時シビウはヨーロッパでも無名の都市だったからであろう、吸血鬼ドラキュラの居城として観光名所にもなってい

るブラン城と同じトランシルヴァニア地方に位置することもあり、同演劇祭公式HPⁱⁱⁱでは「演劇祭の」参加者たちは吸血鬼から身を守るためにポケットにガーリックをしのばせていた」とウィットに富んだ表現で創設時を振り返っている。その後、演劇祭は拡大し続け、1995年には世界8カ国からの参加だったのに対して2005年には68カ国から2000人以上の演劇関係者が集まるまでになった。さらにシビウが「欧州文化首都」に指定された07年には、70カ国から2500人以上が参加する欧州最大級の国際演劇祭へと成長した。第31回同演劇祭はというと、「学生演劇祭」に参加した学生たちを引率してシビウを訪れた日本大学芸術学部演劇科教授・奥山緑氏のレポート^{iv}によると「世界中から5000人が参加し、82会場で、830公演が上演され、一日あたりの観客が10万人！にも及んだ」とある。同演劇祭公式HP^vでは世界最大級の国際演劇祭となった今日の同演劇祭を「国際演劇祭の開催期間中の10日間、世界文化首都がルーマニアのシビウにあることを全世界が高く評価し認めている」と表している。

1995年の第2回以降、シビウ国際演劇祭では各年スローガンを掲げている。第31回のスローガンは「友情」(Friendship)だった。各年のスローガンから同演劇祭が世界情勢と密接に関係しながら、またそれに応答する文化的媒体として成長し、変遷してきた様を窺い知ることができて興味深い。1995年以降の各年のスローガンは次の通りである。

1995年—寛容 (Tolerance)´ 1996年—暴挙 (Violence)´ 1997年—文化的アイデンティティ (Cultural Identity)´ 1998年—結び付き (Links)´ 1999年—創造性 (Creativity)´ 2000年—選択肢 (Alternative)´ 2001年—挑戦 (Challenges)´ 2002年—懸け橋 (Bridges)´ 2003年—明日 (Tomorrow)´ 2004年—遺産 (Legacies)´ 2005年—サ

イン (Signs)´ 2006年—一緒に?! (Together?)´ 2007年—次へ (Next)´ 2008年—エネルギー (Energy)´ 2009年—革新 (Innovations)´ 2010年—疑問 (Questions)´ 2011年—コミュニティ (Community)´ 2012年—危機、文化が変化を生む (Crisis, Culture makes a difference)´ 2013年—対話 (Dialogue)´ 2014年—多様性の中の独自性 (Uniqueness in diversity)´ 2015年—賢く成長する、賢く成長 (Growing smart/Smart growing)´ 2016年—信頼を築く (Building Trust)´ 2017年—愛情 (Love)´ 2018年—情熱 (Passion)´ 2019年—与えるという芸術 (The Art of giving)´ 2020年—力づけられて (Empowered)´ 2021年—ともに希望を育む (Building hope together)´ 2022年—美 (Beauty)´ 2023年—ワンダー (Wonder)´ 2024年—友情 (Friendship)^{vi}

第31回のスローガンである「友情」について同演劇祭・総監督を務めるコンスタンチン・キリアックは公式ブログにある挨拶文^{vii}の中で「この31年間、私たちの友人であることを受け入れてくれたすべての皆さんに感謝します」と述べているが、「友人」の中には数多くの日本人が含まれている。第2回同演劇祭に劇団1980『謎解き河内十人斬り』(藤田傳作・演出)^{viii}が参加して以来、毎年、日本の劇団やカンパニーが参加してきた。2008年には、故・十八世中村勘三郎が率いる平成中村座が公演を行ったことで日本での「シビウ国際演劇祭」の知名度が高まった。さらに、13年には野田秀樹作・演出の『The Bee』が、14年には野村萬斎構成・演出・出演の『マクベス』が上演された。中村勘三郎、平成中村座の演出家として参加した串田和美^{ix}、野田秀樹は「ハリウッド・ウォーク・オブ・フェイム」に倣って始められた「シビウ・ウォーク・オブ・フェイム」^xにその名が刻まれている。

日本人の同演劇祭での活躍は、日本ヘルマニア演劇を招き入れる契機にもなった。2013年にラデュ・

スタンカ国立劇場のレパトリーの一つである『ルル』の来日公演が行われて以来、たびたび同国立劇場の来日公演が行われている。また、15年には「国際相互理解の増進や国際友好親善の促進に特に顕著な貢献」があったとして「シビウ国際演劇祭」が「国際交流基金賞」を受賞している。

〈上演作品〉

シビウ国際演劇祭で上演される800を超える公演は大きく〈室内公演〉、〈屋外公演〉、〈学生公演〉に分類されている。各々の中でさらに〈演劇〉、〈ダンス〉、〈ミュージカル〉、〈オペラ〉、〈コンテンポラリー・サーカス〉、〈音楽（コンサート）〉、〈インスタレーション〉、VRと映像〉にジャンル分けされている。シビウ国際演劇祭は「演劇祭」とはいったものの、その実これだけの幅広いジャンルを扱っている総合的な「舞台芸術祭」なのだ。〈室内公演〉は、シビウ郊外の巨大なブレハブ劇場「文化工場」(Fabrica de Cultura)やシビウ市街地にあるラデュ・スタンカ国立劇場をはじめとした劇場、フィルハーモニー・ホール、大学や学校、教会や歴史的建造物などの施設を使って上演されていた。〈屋外公演〉は、シビウ市街地の中心にある大広場（ピアツァ・マール）をはじめとする広場や公園、ストリートが使われていた。また、いくつかの公演は有料でオンライン配信もされていた。〈室内公演〉は1日につき20から30の演目が上演されるが、開演時間は早いもので朝11時、遅いものは夜11時となっていた。まさに演劇祭会期中はシビウ全体が朝から晩まで演劇祭一色に染まるのだ。

各公演のチケット料金は安いもので50ルーマニア・レイ（1600円相当）、高いもので150ルーマニア・レイ（4800円相当）となっていた。〈屋外公演〉は、ほぼすべてがフリー・アクセス（無料公演）となっていた。

例年〈演劇〉のジャンルでは、地元シビウのラドウ・スタンカ国立劇場のレパトリーから選択された作品を特別に〈ヘリテージ公演〉と名付けて上演している。第31回同演劇祭では、『ファウスト』（「Faust」）、『ゲーム、言葉、クリケット』（「GAME, WORDS, CRICKETS…」）、『スカーレット・プリンセス』（「The Scarlet Princess」）の三作品が〈ヘリテージ公演〉として上演された。いずれもシルヴィウ・プルカレテ（Silviu Purcarete）の演出による。この中で『スカーレット・プリンセス』は、鶴屋南北の『桜姫東文章』を原作としており、キャストは全員が男性、演出も花道を使うなど歌舞伎の要素を取り入れている。2022年には東京芸術劇場において来日公演も行われた作品である。

さらには、各々のジャンルの中に同演劇祭が〈ハイライト〉として指定した公演がある。

〈室内公演／演劇〉では、〈ヘリテージ公演〉の三作品に加えてハリウッド・スターであるティム・ロビンス作・演出による『Topsy Turvy (A Musical Greek Vaudeville)』、同じくハリウッドの名優ジョン・マルコヴィッチとリトアニア人女優のインゲボルガ・ダクネイト（Ingeborga Dakunaite）出演による多国籍プロジェクト（リトアニア、ドイツ、ラトヴィア、米国）『孤独の綿花畑』、ポストヒューマニズムの旗手であるドイツのサザン・ケネディ（Susanne Kennedy）とマルクス・ゼルク（Markus Selig）による『Angela (A Strange Loop)』、串田和美脚色・演出・美術・出演による『あの夏至の晩 生き残りのホモサピエンスは終わらない夢を見た』、フランス映画界のアイコン、イザベラ・アジャーニ出演、フランスのバレリー・シックス（Valerie Six）演出による『The Murnums of the Soil』、利賀フェスティバルでも馴染み深いギリシャの巨匠テオドロス・テルゾポウラス（Theodoros Terzopoulos）演出による『ゴドーを待ちながら』、戦火にあるウクライナのイワン・フラシコ国立アカデミック芸術劇場による『カリギュラ』などが〈ハイライト〉に指定されていた。〈室内公演／ダンス〉では、ベルギーのアンヌ・テレサ・デゥ・ケースマイケル（Anne Teresa De Keersmaeker）振付による

『Exit Above』、台湾のポーチェン・ツァイ (Po-Cheng Tsai) 振付による『アリス』(“Alice”)、スペインのラファエラ・カラスコ (Rafaela Carrasco) 振付による『Nocturna Architecture of Insomnia』などが(ハイライト)に指定されていた。入場料無料の〈屋外公演〉でもフランスのコンテンポラリー・サーカス『The Whale Street』や欧州10カ国が参加したPPPプロジェクトによる『FACE T(W)O』などを含むいくつかの公演が(ハイライト)に指定されていた。

毎年、日本からも複数の劇団やプロダクションが同演劇祭に参加しているが、第31回同演劇祭では(ハイライト)に指定されていた串田和美による『あの夏至の晩 生き残りのホモサピエンスは終わらない夢を見た』に加えて山本章弘率いる山本能楽堂による『慈愛—魂の行方』、鈴木ユキオの振付・演出・出演によるコンテンポラリー・ダンス『堆積・Accumulation』、また「学生演劇」部門では日本大学芸術学部演劇学科の学生たちによる『QUEEN』(中野成樹・演出)が上演された。

筆者は4日間の滞在中に次の7作品の〈室内公演〉を観劇した。ポーランドのスタジオ・シアターギャラリー (Studio Theatre Gallery) によるパフォーマンス／インスタレーション『The Employees』、既述の『Exit Above』、イタリアのビッポ・デ

ルボノ (Pippo Delbono) 作・演出・出演による『Awakening』、スペインのオペレッタ『A Comedy of Operas』、既述の『堆積・Accumulation』、フカレスト国立劇場による『A Few People Away from You』、既述の『アリス』。(観劇した順に記述)

『The Employees』、『Awakening』、『A Few People Away from You』はシビウ市街地から車で10分ほどのところにある廃工場跡に建てられた「文化工場」で上演された。演劇祭で賑わう市街地を出て閑静な住宅街を通り過ぎると突如として巨大な工場跡に辿り着いた。劇場の建物の前には、あえて残しているのだろうか、かつての工場の高架線がそびえ立っており独特な雰囲気漂わせている。演劇祭のために建てられたこのプレハブ施設には、二劇場があり、中央の大きなロビー・スペースで分けられている。

観劇した7作品の中では『The Employees』が特に印象に残っている。近未来の宇宙船の中で働く人間とアンドロイドたちが「人間性」を巡って葛藤する姿を描いたデンマーク人の小説家オルガ・ラヴン (Olga Ravn) による同名サイエンスフィクションをポーランド人の演出家 Lukasz Twardowski が舞台化した作品である。劇場に入ると空間の中央に宇宙船が建てられており、その宇宙船を囲むよ



画像1：劇場の前



画像2：ロビー・スペース

うに四面の客席が設けられていた。宇宙船は透明の壁で囲まれているため、観客は宇宙船の中の様子^{xiii}を見聞きすることができる仕掛けだ。また上演中は、数十分ごとに自由に観る場所を移動する時間と写真撮影が可能な時間が設けられていた。テクノロジーを駆使したインスタレーション／パフォーマンスにもかかわらず感傷的で人間的なドラマが描かれているためだろうか、またはパフォーマンスの最後にほとんどのパフォーマンスが全裸になる前世紀的な演出のためだろうか、不可思議なノスタルジーを感じた。

もう一つ、シビウで観た作品の中で忘れられないのは『FACE(T)(W)O』だ。ドイツ、ルーマニア、イタリア、チェコ、リトアニア、デンマーク、ポルトガル、ラトビア、ノルウェー、スペインのEU諸国から集まった104名の若いダンサーたちによるこの作品は、宿泊していたホテルからほど近い大広場（ピアツツァ・マレ）で上演された入場料無料の〈屋外公演／ダンス〉である。公演当日の昼間に大広場を通った際、仮設ステージのホリゾントに少々ステージ面へと傾いた巨大な鏡が設置されたセットが建っており大いに興味をひかれた。開演時間の5分くらい前に大広場に行くと、すでに大勢の観客で埋め尽くされていた。観客はすべて立ち見である。パフォーマンスは、始めか



画像3：撮影タイムに筆者が撮影した『The Employees』の宇宙船

ら終わりまで圧倒的だった。ステージ上には、どこか棺を思わせる箱がいくつも設置されていて、104名のダンサーたちがときにその箱を動かしながら次々と様々にフォーメーションを変化させながら踊っていく。筆者は、かなり後方に立っていたため実際のステージ上のダンサーたちの動きはほとんど見えず、ホリゾントの鏡に映るリフレクションのみを観ていた。大広場に集まる多くの観客を想定したスマートな装置である。途中からは、ステージの床に投影される映像を駆使したパフォーマンスへと変化する。映像は、美しい花畑や四方が巨大な壁で囲まれた部屋の中へと変化していく。パフォーマンスがクライマックスに差し掛かったそのとき、数十名のダンサーが観客の中へと走り出し、広場の数カ所に設置されたいくつかの小島（小さなステージ）へとたどり着く。小島にも透明の棺とおぼしき箱が置いてあり、何人かのダンサーはその箱に入って身動きが取れなくなる。鏡のある大きなステージへ向かって助けを求めるが、帰ることはできない。

『FACE(T)(W)O』というタイトルは、「動詞の「〜に直面する」と「一つの世界」を掛け合わせているのだろう。鏡を使ったセットは、機能性だけでなく作品のテーマと見事に直結しているのだ。作品の紹介文^{xiv}には次のように記されている。

私たち人間が自分たちのために列の世界、より良い世界、より自由な世界を創ったら何が起ころうだろうか？しかし、誰にとってより良いのだろうか？誰にとってより自由なのだろうか？それでも自分たち自身で決めるのだろうか？私たちは、独自のバブルを選ぶのだろうか？それとも、Cookieやその他の追跡方法によってバブルに割り当てられるのだろうか？

筆者はこの作品を通してヨーロッパの今、世界の今を「目撃」したように感じた。

〈学術プラットフォーム〉

例年シビウ国際演劇祭の会期中には舞台芸術の上演に加えて、いくつかの関連イベントが行われている。筆者が参加した学術プラットフォーム^{xv}もそのうちの一つである。このプラットフォームは2015年、同演劇祭・総監督のキリアックが教授を務めるシビウ・ルチアン・ブラグ大学 (Lucian Blaga University of Sibiu) に「演劇および舞台芸術領域」の博士課程が設立されたことを機に「シビウ国際演劇祭の文脈において、高等教育機関の協働と演劇研究を促進する」ことを主たる目的として創設された。以降、同演劇祭会期中の2日間、ルチアン・ブラグ大学を会場として演劇祭関係者より推薦、招待された舞台芸術や文化政策に関わる研究者や高等教育機関に教員として所属している実践家が世界各国から集まりシンポジウムを開催している。

2024年度学術プラットフォームは「視覚的演劇性／パフォーマンズの視覚性」をテーマとして6月21日、22日に世界17カ国23高等教育機関より30名あまりの研究者や実践家が集まり開催された。キリアックは、この学術プラットフォームを「芸術的創造に密接に関連した研究領域のごく自然な延長」^{xvi}と位置付けて重要視しているが、その表れとして学術プラットフォーム開会式には、キリアック、ルーマニア文部大臣のリジア・デカ (Ligia Deca)、同文化大臣のラルカ・トゥルカン (Raluca Turcan)、同演劇祭関連カンファレンス総責任者であり学術プラットフォームのモデレーターを務めるオクタヴィアン・サイウ^{xvii}が列席していた。

筆者は、学術プラットフォームの場で京都芸術劇場・春秋座について口頭発表した。発表要旨は次の通りである。

2000年に三世市川猿之助の「若者を本物の舞台芸術を通して育成したい」という希望のもと

に設立された春秋座は、大学の劇場として教育目的のためだけでなく一般興行にも使われている。同劇場には歌舞伎公演に必要な盆やセリ、花道が備えられているが、現代演劇やオペラ、バレエ、ミュージカルなどの上演も行っている。さらには、海外からの招聘公演も積極的に上演している。そういった公演では、「花道」を独自に再解釈した演出も見られる。フィリップ・ケーマ演出による『もぐらたち』やサイレン・チョン・ウニョン『変則のファンタジー・韓国版』などがその好例である。^{xviii}

筆者の発表を受けてモデレーターのサイウは、「歌舞伎の様式や歌舞伎劇場の構造は、海外の現代演劇に大きな影響を与えている。(ヘリテージ公演)として上演される『スカーレット・プリンセス』はその例であり、『桜姫東文章』を原作とした同作品の出演者はすべて男性俳優である。また、シビウでは「文化工場」の劇場に「花道」を備えて上演される」と返した。

筆者の他に日本からは、〈学生公演〉に参加する学生たちを引率してきた日本大学芸術学部演劇科・准教授の山口英峰が「KAAT 神奈川芸術劇場の舞台構造」について、また同学専任講師／舞台美術科の青木拓也が、自らが美術デザインを担当した「柴幸男作・演出による『わが星』の舞台美術デザイン意図」についてそれぞれ発表した。

次にその他の研究者、実践家による発表のいくつかを紹介する。(以下、発表者名／所属機関名・職位…発表テーマの順で表記)

■ ロバート・ショーンシー (Robert Shaughnessy) / 英国サリー大学ギルフォード演劇学校・教授…ドラマツルグとして関わったフルート・シアター (Flute Theatre) による発達障害を抱えたパフォーマーと観客のためのシェイクスピア

■ Ma Hui / 中国伝媒大学南広学院・准教授、翻訳者…舞台構造と機構の発展によって聴覚芸術から視覚芸術へと変容したチャイニーズ・オペラ

■ Rafal Jonczyk / ポーランドアダム・ミツキエヴィッチ大学・准教授…バイリンガルにおける感情言語処理の脳科学的ダイナミクス

■ Saviana Stanescu / 米国コーネル大学・教授、劇作家…NYダニエル・グワーツマン・ダンスカンパニー『e-Motion』に見る舞台芸術におけるAIの能動的な活用

■ Alexandru Cinean / シビウ出身の現代美術家…芸術の進化過程における視覚芸術と舞台芸術の相互関係

※シビウ演劇祭会期中に関連イベントの一つとしてCineanによるエキジビジョン『Beautifully Damages』が大広場にあるブルケンタール博物館内の美術館で開催された。

〈シビウ国際舞台芸術マーケット〉

学術プラットフォームのモデレーターであるオクタヴィアン・サイウに勧められて6月24日から27日まで開催されたシビウ国際舞台芸術マーケット^{III} (SIPAM) のオープニング・イベントに参加した。SIPAMは1997年に創設されて以来、舞台芸術フェスティバルやアーティスト、舞台芸術に関わる独立団体や国立機

関を繋ぐ文化ネットワークへと発展してきた^{III}。学術プラットフォームが主に舞台芸術領域の研究者や実践家が参加するプラットフォームであるのに対して、SIPAMは舞台芸術領域のプロデューサーや制作者、文化政策の関係者などが参加する組織だといえる。そのオープニング・イベントでは、キリアック、サイウ、また同演劇祭室内公演キュレーター／コーディネーターのVicentiu Rahauらのシビウ国際演劇祭関係者に加えてエディンバラ・フェスティバルとアビニオン演劇祭のプログラム・ディレクターの挨拶があった。キリアックは開会に寄せたスピーチの中で、シビウ国際演劇祭を発展的に開催するために、「文化工場」をはじめとした劇場の新設や教会などの歴史的建造物の改装、さらには参加者や観客を収容するための宿泊施設やそれにとまなう道路等インフラ整備なども進めてきたことを話していた。シビウ国際空港も同演劇祭の国際的な拡大にともない必要に迫られて新設したのだという。キリアックのこのスピーチから国内外の行政機関や民間企業を巻き込んだの

壮大だが堅実で計画的な文化政策のもとに世界最大級の国際演劇祭が維持されていることを窺い知った。

SIPAM会期中は、世界各国から招聘されたプロデューサーや国際的な舞台芸術フェスティバルのプログラム・ディレクター、文化政策や文化外交の関係者などがセミナーやシンポジウムを開催している。

〈特別コンファレンス〉

例年同演劇祭の会期中には、〈特別コンファレンス〉と称して演劇祭に参加しているアーティストや演出家によるトーク・イベントを開催している。第31回同演劇祭では、ミハエル・バルシニコフ、ティム・ロビンス、ジョン・マルコヴィッチをはじめとする世界的アーティストを配して22もの〈特別コンファレンス〉が開催された。

筆者は、自らが率いる劇団「アクターズ・ギャング」(The Actor's Gang)による『Topsy Turvy (A Musical Greek Vaudeville)』の演出家／出演者として同演劇祭に参加していたチーム・ロビンスによる〈特別コンファレンス〉を視聴することができた。ロビンスはコンファレンスの中で、自身が演劇活動を始めたきっかけや演出家、俳優として作品と向き合う際の哲学を述べていた。また、上演作品の創作意図について「世界が混沌としていて皆が大きな不安を感じている今だからこそ、我々は〈喜劇〉を上演して人々に笑いと希望を届けなくてはならない。我々も人間なのでそれはとても困難なことではあるが」と述べた。世界的な名優が等身大で語る姿に筆者は感動を覚えた。

〈おわりに〉

今回のシビウ滞在中に筆者は、同演劇祭・総監督のキリアックと面談することができた。同氏が総支配人を務めるラデュ・スタンカ国立劇場内にある彼の執務室での30分ほどの面談の中でキリアックは、中村勘三郎に始まり串田和美、野村萬斎、野田秀樹などに加えて、彼らの公演のプロデューサーや主だったスタッフ、さらには同演劇祭のボランティア・プログラムのスポンサーであるコカ・コーラボトラーズジャパン株式会社に至るまでを列挙し、数多くの日本人との「友情」によって同演劇祭が進展してきたことに感謝の意を述べていた。筆者が、串田和美の後継者として「まつもと芸術館」の芸術監督に就任した木ノ下裕一と倉田翠、また横浜ダンスコレクションで「シビウ国際演劇祭賞」を受賞した田村興一郎は京都芸術大学の卒業生であることを話すと、キリアックは机の上にあった大学ノートを広げ、彼らの名前のスペルを尋ねながら一人一人の名前を几帳面に

書き込んでいった。

キリアックは公式プロフィールにある挨拶文^{xxx}の中で「この31年間、私たちの友人であることを受け入れてくれたすべての皆さんに感謝します」とした後に「そして、私たちは新たな友人もこのコミュニティに向かい入れるよう尽力することを約束します、国のために、世界のために、より良く、より明るい未来のために」と続けている。筆者は、京都芸術大学から巣立った彼らが「新たな友人」となって羽ばたいていくことを願っている。国のために、世界のために、より良く、より明るい未来のために。

〈注〉

・文中の人名、作品タイトル、地名等の固有名詞は、参照できる範囲でカタカナ表記に変換している。その他は英語で表記している。
・引用文は筆者翻訳による

- i 現在、ラデュ・スタンカ国立劇場
- ii 現ラデュ・スタンカ国立劇場総支配人、シビウ国際演劇祭総監督
- iii シビウ国際演劇祭 H d https://www.sibfestro/en/about-us?about=about_us
- iv 日藝CROSS H d <https://cross.art.nihon-u.ac.jp/post/176>
- v シビウ国際演劇祭 H d https://www.sibfestro/en/about-us?about=about_us
- vi シビウ国際演劇祭 H d https://www.sibfestro/en/about-us?about=about_us
- vii 2024シビウ国際演劇祭公式チャンネル Fits 2024-Friendship
- viii 劇団1980 H d <http://gekidan1980.com/1.html>
- ix 串田和美は平成中村座の演出家として同演劇祭に初めて参加して以来、2015年にはシビウ・ラデュ・スタンカ国立劇場の俳優たちと協働創作をするなど同演劇祭に貢献している。 H d <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000001.000014287.html>

x	2024 シュウ国際演劇祭公式ブログ	Fits 2024-Friendship p.42
xi	国際交流基金 H p https:// www.jpf.go.jp/i/about/ award/ index.html	
xii	イタリア人俳優によるイタリア語での公演	
xiii	「人間」役も「アンドロイド」役も「人間」が演じているため「観客にはすぐには「人間」と「アンドロイド」の区別がつかないが、物語の進行とともに明らかになる。	
xiv	2024 シュウ国際演劇祭公式ブログ	Fits 2024-Friendship p.186
	筆者翻訳による	
xv	正式名称は「舞台芸術および文化政策領域における博士課程のための国際プラットフォーム」International Platform of Doctoral Research in the Fields of Performing Arts and Cultural Management	
xvi	2024 シュウ国際演劇祭公式ブログ	Fits 2024-Friendship p.281
xvii	各年、同演劇祭スローガンに呼応した芸術プラットフォーム独自のテーマを設定している。24年度のテーマは次の通り。Visual Theatricality/Performative Visuality: Elective Affinity and the Metaphors of Imaginative Friendship	
xviii	2024 芸術プラットフォーム公式ブログ	p.9
xix	開会式はオンライン参加	
xx	香港都会大学 H p https:// www.hkmu.edu.hk/hlt/ octaviansaiu/	
xxi	口頭発表は英語で実施	
xxii	Sibiu International Performing Arts Market (SIPAM)	
xxiii	2024 シュウ国際演劇祭公式ブログ	Fits 2024-Friendship p.39
xxiv	2024 シュウ国際演劇祭公式ブログ	Fits 2024-Friendship